

町の特産「城下かれい」を育むアマモ場の保全

日出地域活動組織

日出町について

日出町は、大分県の中北部に位置し、別府湾に面す。湧水が豊富で、町内の上水道もほとんどが良質な地下水で賄われている。

町の歴史は古く、漁業も古来より営まれており、現在は小型底びき網や刺網、小型定置網などを行っている。

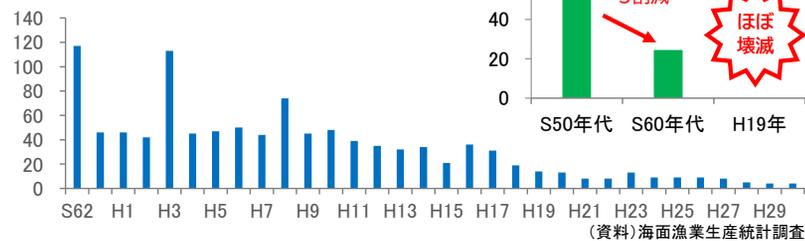


特産「城下かれい」とアマモ場の現況

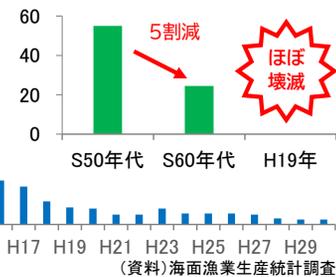
町には全国的に有名な「城下かれい」と呼ばれる水産物の特産品がある。「城下かれい」は、日出城跡下の真水が湧き出す海底で育ったマコガレイの呼び名で、江戸時代には徳川家に献上されていた。

しかし、近年、江戸時代から親しまれてきた「城下かれい」の漁獲量が減少している。この減少の一因として、マコガレイの産卵場の減少が挙げられている。そこで、町では、平成12年からマコガレイ中間育成施設で稚魚を育て放流し続けている。また、これら稚魚が成長していく上で重要なアマモ場が、社会資本の整備等による埋め立てなどにより大きく減少したことから、その保全が求められる。

日出町のカレイ類漁獲量 (ト)



別府湾アマモ場面積 (ha)

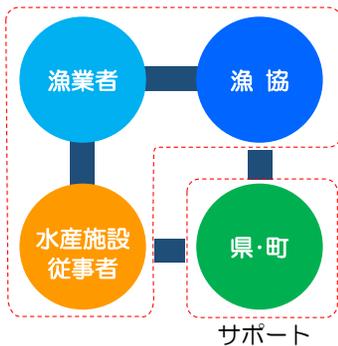


組織の設立および活動方針

上記課題の中、町の単独事業でアマモ場の造成が平成23年度から進められ、その継続が求められた。そこで、平成28年度に漁業者を主体とした「日出地域活動組織」を設立し、アマモ場の維持・回復に向けた取組を中・長期的に継続させることにした。

活動方針は、当初、アマモの被度が不安定な町内3地区の地先で、本種の移植や播種を行ってきた。その結果、被度50%を安定的に維持するようになり、一定の成果を得た。一方、町内で唯一安定的なアマモ場を維持してきた地区において、アイゴによる食害で被度が減少するなど新たな問題が顕在化してきた。そこで、令和3年度から活動場所を改め、以下の方針で活動を展開することにした。

活動組織



● 活動方針

アイゴの食害等による悪影響が懸念される現存アマモ場の群落縁辺部に本種の移植と播種を行い、安定的な藻場の維持、拡大を図る。

現存アマモ場の維持・拡大に向けて

(1) アマモの移植

アマモの移植は5~6月に実施する。移植場所は、アマモ群落の縁辺部である。移植用のアマモは、町内でアマモが繁茂する漁港で間引いたものを使用する。

方法は、活動当初は粘土法やアマモの地下茎に石を結束し、船上から投入する手法を用いた。しかし、移植した株の流出が多く、課題となった。そこで、アマモ10株を砂と腐葉土が入った麻袋に植え、株が流失しないよう袋を麻紐で閉じ、船上から投入する方法で取組を進めている。



(2) アマモの播種

アマモの播種は11月に実施する。播種の場所は、アマモ群落の縁辺部である。播種用の種は、アマモの花枝を5~6月上旬に採取し、マコガレイ中間育成施設で成熟・種子選別・保管したものを利用する。

方法は、砂と腐葉土を混ぜ入れた麻袋に、一握りの種を均等に入れ、袋を麻紐で閉じ、船上から投入する。

また、この手法で広い活動エリアをカバーするには困難なことから、今年度からワッシャーの穴に5粒の種を入れ、麻布で包み、泥団子の中に入れ、船上から投入する方法を試験的に実施している。



活動の成果と今後の方針

令和3年度から活動場所を変更し、アマモの維持・拡大を図ったところ、本種の平均被度が14%から27%に向上した。また、活動エリアのアマモ場が少しずつではあるが、分布を広げている。

さらに、タイムラプスカメラでアマモ場の観察を行ったところ、マコガレイの稚魚の他、メバル稚魚やマダイ幼魚の定着、アオリイカの来遊など様々な魚介類が確認された。また、秋期にアイゴに食害されるもののアマモの生長点は残り、翌年には再び生長することが観察できた。今後も観察を続けながら、アマモ場の維持・拡大を図っていききたい。

アマモの平均被度 (%)

